令和４年神奈川県議会第３回定例会 次世代育成・デジタル戦略推進特別委員会

令和４年10月４日

鈴木委員

私からは、最初にお願いをしたいと思います。いただいた14ページ、15ページなんですけれども、情報セキュリティクラウドの概念図とか、コンピュータセンターの概要図があって、実際、これはどんなようなものなのか、県庁自体のことが分かるわけがない。情報担当さん、分からないんじゃないの、これ。継ぎはぎにしてというか、どういう質疑をしろって言うの。庁内ネットワークの運用というところが大事なんだろう。そうしたらきちっとしたＬＧＷＡＮと、そしてそこのところに出てきているバックアップ含めた図と合体したような図というのがなかったならば、質疑はできないじゃない。そう思わない。

情報システム担当課長

委員御指摘のとおりだと思います。項目ごとにちょっと図をつくってしまった関係で、セキュリティクラウドはセキュリティクラウドの絵、コンピュータセンターはコンピュータセンターの絵と、細切れのようなことになってしまったという御指摘はごもっともだと思います。いわゆる庁内ネットワークを含めたシステムを含めた全体像、こちらの概要図というものを本来でしたらつけるべきだったと思いますので、そこにつきましてはおわびを申し上げたいと思います。

鈴木委員

私はあなたのところに言っておきたいのは、ＩＩＪの概念図にもう全部出ているんだよ。今、私見て、なるほどな、こういうような形であなた方がやっているのかと。私がすごく心配したのは、35団体から実際に新県のＷＡＮにつながるところ、当然ゲートがあるだろうけど、ここ自体というのはインターネットの検索となっている。ここのセキュリティーとかということは、多分　ＩＩＪとはちょっとまた違った形であるんじゃないのかなと思ったものだから、こういう一つ一つのものというのは、あなた方は完璧だ、完璧だというのは、今回されていらっしゃるけど、こういう一つ一つの業務委託に、果たしてどういうものなのかという思いが私はしたわけです。あなたに謝ってほしいわけじゃない。

今回１回書き直していただいたけれども、どこからどこまでもみんなばらばらで、一つ一つのことが書いてある。デジタル戦略としてどういうことをやるんだと、見えないわけだよ。だから、どうしても質問は個別の問題になっていく。

私は今、質問させていただきたいのは、このデジタル戦略とかいろいろ言っているけれども、私も見させていただいた、かながわＩＣＴ・データ利活用推進計画を見させていただくと、何を目標にしているかが書いていないだよ、これ。いきなり各論に入る。ああでもない、こうでもないと書いてあるけれども、そもそもあなた方がやろうとしている目標は何なの。デジタル戦略とか、いろいろさっきから言っているけれども、何がしたい。具体的に、今日は特別委員会だからいいじゃないですか、常任じゃないから。具体的にどんなことでもあ

れだけど、利活用推進計画までつくって、何を目標にしたいのか。ゴールがなくてこれをつくったってどうしようもない。
　ゴールは先ほどのＣＩＯやＣＤＯといったら私は許さない。何をしたいのか。書いていない、どこにも。ＩＣＴ推進計画を見たって。そこが私は、今回の問題で一番大きな問題で、いつまでも申し訳ないですけれども、ＩＣＴだ、ＤＸだ、それで今度、デジタルだと、もう言葉はどんどん飛び交うけれども、じゃ、どこまで県庁として進んでいるのかって私たちは分からない。
　片や、各論に入ると、あなた方はこうだ、ああだと言って、それはそうだ、あなた方は専門家なんだから。そういう人たちに私が言いたいのは、どこまで進んでいるんですか。それが見えないものというのは、計画とは言わないでしょうと私は言っているわけ。何を目指しているの。室長でもいいですよ。
デジタル戦略本部室長
　委員御指摘のとおり、例えば計画でありますと、施策ごとに指標が設定されていたり、戦略におきましても、正直言いますと、定量的な数値目標というのはあまり決められてないところでございますので、それをもってどこまで進んだかというのがなかなか見えづらいものになってございます。
　我々としましても、今、先ほどから言葉が飛び交っている、例えばＤＸという言葉が飛び交っていたり、ＩＣＴという言葉が飛び交っている。本来だと、ＤＸというのは、物すごく概念的に大きいところで、かなり将来に向かっての話だと思います。今、ぶっちゃけを申しますとアナログからデジタル、デジタルからＩＣＴ、ＩＣＴからＤＸということでございますが、アナログからデジタルの部分とデジタルからＩＣＴの部分、これが混在しているぐらいでございますので、ＤＸというのはかなり先の話だということになってございます。
　我々としては、将来的にはＤＸを目指しますけれども、まずは一旦、アナログからの脱却というか、アナログをデジタルに変えていく、データ化していくというところをまず基軸に考えながら、業務の効率化を図りながら、まずはいろいろなところでデジタルが活躍するような場面をつくっていきたいと。これが委員の御意見では何をやっているのか分からないということで、私もちょっとしどろもどろになってございますが、いずれにしましても、今においては、デジタルでできていないところはデジタルでやっていくというところをまず目標に考えているというところでございます。
鈴木委員
　ありがとうございます。ただ、私はもうデジタルとかいろいろ言うけれども、この推進計画の中の９ページのところに、ＣＩＯとＣＤＯ、これらの役目が書いてある。そもそもが、私、デジタル化をする大前提というのは、１万数千人いらっしゃるのかな職員、分からないけれども、その巨大な県庁というものを全体としてどういうふうにして捉えて、どういうものがシステムになっているのか、フローになっているのかというシステム図ってあるのかね。県庁全体で、教育だとか、いろいろある。先ほど安全防災とか言っていた、そのシステムを俯瞰したような、一貫したシステム図ってあるのか。
デジタル戦略本部室長
　今、そのような全体を俯瞰して、本当にいろいろな設計図面の大きい図面が

あるかと申しますと今はございません。
鈴木委員
　そもそも、デジタル、デジタルとあなた方言うけれども、全体を俯瞰したものから全てが始まるんじゃないの。私は少なくとも、今まで私が見てきた、私もプロジェクトをやったことあるけれども、全体のフローが分からずして、部分的にやるから面倒くさいことがいっぱい起こるんだよ。だって、ここを紙にした、ここをデジタルにしようと、デジタルにしたのはいいけど、かえって手間かかる、結構県庁の中にあると思うよ。
　その中で、全体を俯瞰したようなシステム図というのは、このＣＩＯとかＣＤＯだか、今回また外から来たんだろう、この方。この方なんか、県庁の中の全体のシステムとか何か分からずして、何をやろうとするんだろうと私は思うわけだよ。少なくても何年にもわたって偉い人はいっぱい来た。神奈川県に。そもそもは全体のシステムが分からない。そういう人が来ても、何しても分からない。先ほどデジタル戦略担当課長が質問に答えていたけれども、局長とＣＩＯとのミーティングだみたいな、ミーティングだけで分かるわけない、部分的なことをやるんだもの。私なんか逆に、教育と、例えば福祉子どもみらい局なんて、重なるところはいっぱいある。そういう壁を取り払うのがデジタルだと私は思っている。
　そういうような俯瞰したものにならなければ、どんなに議論をしたとしても、本当の意味での県庁のデジタル化はどこにいったのだろうと思いますけれども、どうでしょうか。
デジタル戦略本部室長
　先ほど本当にオール県庁、なかなか俯瞰した図はないと申し上げました。また、一方でシステムというときに、やるときに、業務を可視化したものがないといけないと。要するに業務フローと言われるものです。委員の御意向に沿っているかどうかはよく分かりませんが、例えばシステム開発などをするときには、今ですとアジャイル方式と言われるような、要するにシステムをつくって、失敗したら改修をして、失敗したら改修してというやり方があります。これ今デジタル庁でも取り入られていますが、実はそれですと場当たり的な対応になるということがよくあります。本来は、システムとは別に業務全体のフロー、流れとかというのをつくった上で、真に必要な、システムに必要な機能を定義していく、もしくはシステムによらず、業務改善、制度などを見直すことによって業務の効率化を図る。本来はこういった姿も正しい姿だというふうに認識をしております。
　また、我々で導入したＲＰＡというのがございますが、これはどちらかというと本当に部分最適化というものでございます。ただ、ＲＰＡの入れ方も、県庁の場合はデジタル戦略本部室が一括してやってございますが、自治体によってはパソコンに入れて、各職員にやらせているというところもあります。我々の場合は一括してやるときにどういうやり方をやっているかというと、その業務に対する業務フローを必ず作成しております。これはなぜかというと、相手側の所属の職員が転勤してしまったときに、業務の継続性が失われるということがございますので、我々自身も業務フローの重要性は分かっているところで

はございます。
　ただ、委員が御指摘された全庁を俯瞰して、システムはこうで、ネットワークはこうでというような、そういう図面はちょっとないというところは本当に申し訳ございません。
鈴木委員
　謝る必要ないです。私はまずそれをつくってほしい。要望しておきます。常任じゃないからやらなくてもどうということないでしょうけれども、よろしくお願いします。あわせて、今、ＲＰＡの話があったけれども、突然聞くけれども、先ほどの質問の中にＡＩ－ＯＣＲ、これは協力金のときは入れたのかな。分かるかな。いいや分からなかったら。
　私、あれだけ時間をかけていてなんでって言ったんだ、前局長さんにも。そういう一つ一つのことが、ツールとしてのそういうものというのを少しでも短時間で、本当に見づらい字というようなもの、ＡＩが見るというもの自体も入れなければいけないという思いもしましたので、全体を俯瞰したものプラス、そういう一つを入れることによって、効率をこんなにできたんだということを見せていくのもあなた方の仕事だと思いますので、そういうことを見せていただきたい。
　２つ目には、先ほどから話を聞いていると、ＵＩ、ＵＸという、ユーザーインターフェースとユーザーエクスペリエンスと、先ほどデジタルエクスペリエンスって言っていたけど、私は逆だと思っている。ユーザーエクスペリエンスだと私は思っている。そもそもが、この中であなた方が、先ほどからこれこれ、こういうようなシステムだと、今、見させていただいている完璧なものでしょう、ＩＩＪでもってクラウドとしてこういうふうにやっているのは。逆に、今使っていらっしゃる職員の方々から、どのような形で使い勝手や、こういうふうにしてくれというようなこと、どのようにして吸い上げているのか。ユーザーエクスペリエンスとして、ユーザーインターフェースとして、ＵＩ、ＵＸとして、どのような形で職員が、使っている方のユーザーの声というのは反映しているのか。
デジタル戦略本部室長
　例えば、我々が今、デジタルで共通して一番日常的に使われているのは、先ほどのグループウエアシステムというのがございます。これはかなり長く運用しているものでございますが、こういった全庁に使うものについては、毎年度利用者満足度アンケートみたいなものをとりまして、本当に満足していただいているのかとか、あとはこういった改善点があるのかという御要望をお伺いするようにしています。
　また、我々が運用していない、例えば税務であったり、事務であったりということは利用者も限られているというところもございますので、それぞれのところで、例えば会合でなりで調整をしているということでございます。
　あとは、システムを運用するに当たって、我々はガイドラインを設けておりまして、その中でも単純にシステムを導入しただけじゃ意味がなくて、どちらかというと導入した運用の後どうしようかという中では、こういう利用者満足度アンケートをきちっと毎年度取っていただくようにお願いしているところで

ございます。
鈴木委員
　室長ね、私は、ＵＩ、ＵＸというのは、これから大事な県庁の中のツールだと思います。これを本当にしっかりしておかないと、あなた方がどんどん入れていく。入れていくけれども、それを使っている人たちは、何だよという、時間が短縮されたのか、慣れないとかということだけじゃなくて、使い勝手というのは今どこの会社も、ＵＩ、ＵＸというのは、物すごい勢いで広まっています。これをもう一度しっかり見てやっていただきたいと私は要望しておきます。時間もないので。これは要望しておきます。
　３つ目は、さっきから聞いていて心配だったのは、マイＭＥ－ＢＹＯカルテ、130 万とか書いてある。予算委員会でも徹底してやらせてもらったけどさ。これ、課長、本当にこんなに、出てきている数字というのは、どのような数字からこれが出てくるのかね。マイＭＥ－ＢＹＯカルテの登録者数というのは。アプリをただダウンロードしたという数なのか。
デジタル戦略担当課長
　マイＭＥ－ＢＹＯカルテは、ＬＩＮＥの公式アカウントを活用しました未病オンラインというものと、それからスマホのアプリと大きく分けてこの２つがございます。
　ＬＩＮＥ版のほうを使っていただいているのが、およそ 110 万ぐらいで、スマホのアプリを使っていただくのが十数万でして、130 万の階層はＬＩＮＥ版を使った簡易版に御登録いただいている方の数字という形になります。
鈴木委員
　そうだよね。課長、この前、この 130 万は大いに結構ですよ、悪い数字じゃないから。私が心配しているのは、実際に活用するまでになるとちょっと、私の経験であれだけど、何人かの方から聞いたんですが、入れるのに 15 分ぐらいかかったて言うんですよ。私自身もそうだったんですが、もっと遅かったんだけど。そういうようなものを入れるのかね、本当にこれ。自分の実体験から言ってはいけないのかもしれないけれども、これを 130 万もの人が面倒くさいことをしながらも、マイＭＥ－ＢＹＯカルテを入れるものなのかと私は思っているので、実のことをいうと、要はデータを、登録者数といっても、登録して実際に使っている方はどのくらいいるんですか。
デジタル戦略担当課長
　なかなか使っているというのを、どういう人が使っているかというのがなかなか難しいんですが、データが更新されている人というのを、分析ツールで見ますと数万程度いらっしゃって、その方は何かしらデータを更新しているというふうには考えておりますが、私どもそれで十分だとは思っていませんでして、委員がおっしゃられたように使い勝手のところ、まさにＵＩ、ＵＸに通じるところでございますので、ここは改善をしていかないといけないと思っておりまして、ここは一生懸命取り組んでいるところでございます。
鈴木委員
　課長、苦しみは分かりますけれども、作っている側だからね。だけどやっぱり、ＵＩ、ＵＸの立場からすると、これはないよ。入れるのにそんな時間がか

かってやる人が誰がいるんだろうか。ほかにもいっぱいあるんだから、ツールは。私はぜひとも、もう一度使い勝手のいいものを入れていただきたいというのと同時に、もうちょっと質問させていただきたかったので、これを使って、どうぞ県民の方々の健康のためにとおっしゃるけれども、あなた方はこのデータを取り込んで、何県民に出した。例えば県民として入れてくださったら、失礼ですけれども、神奈川県民は肥満ぎみであるとか、身長が例えば168センチ、男が平均だとか、もうちょっとダイエットしたらいいんだとか、もう今のデータだけだってすぐ出てくる。こういうのは出ているのか。後ろにいる方もそうじゃない。あなたじゃないの、担当。発言の機会がないと思って。

未病産業担当課長

未病指標でございますけれども、今、御指摘いただきましたとおりデータを御本人が15の項目についてお答えをいただきますと、そちらが未病指標の数値という形、それから４つの指標、生活習慣、認知機能、生活機能、メンタルヘルスの４つの機能のバランス、それからそれに３つ星で、１つ星から３つ星までデータの判定が出るんですけれども、そちらの星の数に従ったアドバイスというのを個々にお返しをするという機能を持っております。

鈴木委員

多分そうだよね。だけども、みんな多くの方というのは、神奈川県民は、例えばワインをいっぱい飲むとか、あんなのはテレビでみんなやっているよ。あなた方から、一人一人じゃなくて、これだけのデータを持っていたら、各部局に関わるデータ開示と同時に、それを全部ソートした形できちっと出すのが本来のあなた方の役目なんじゃないの。そうしなかったら、別に、あとはもう、ソフトがそれでやってくれるわけだから、それをまとめてどういうふうにしたらいいんだと。神奈川県で。それが未病だか私も分からないが、未病、未病といっているから未病なんだけれども、そこのところをどうするのかというのは、あなた方の本来取り組むところじゃないのかと思うんですけれども、どうですか。

デジタル戦略担当課長

マイＭＥ－ＢＹＯカルテのデータについては、まだまだ利用できていないところは現実でございます。ただ、やっていかないといけないところですので、まずは使っている人に日々返せるように、あなたが登録したからデータ化するとこうですよというように返せるように。それから、全体的なものも分析してできるように、先ほどから答弁させていただいていますデータ統合連携基盤なんかも使いながら、データ分析、本人に返すということをやっていきたいと考えています。

鈴木委員

最後に、情報課長さん、マイナポータルがあって、検証のシステムがあって、そしてＧＷＡＮかあったよね。この３つというのは、これからマイナポータルを統合していったときに、あなた方は先ほど、課長さんの答弁だと、データはいつでも取れますよとおっしゃっていた。多分私もそうだと思う。こうなっていったときに、今、少なくとも川崎市、横浜市は入っていない。それ以外に、あとは横須賀だと思う、システムが全然違うから。あなた方はクラウドを持っ

ている。これに対して、今後どのような形に持っていこうとしていくのか。
　何でこれを聞くのかというと、向こうがそもそも大都市制度ということをおっしゃって、そうであるならば、システム上のことをあなた方が旗印にしてしっかりとやれば、これに対してどういうふうにやるのか、大変難しい問題です。どういうふうに考えていらっしゃるのか。
情報システム担当課長
　委員御指摘のとおり、共同運営は平成16年から県内全市町村を目指してスタートしたのではございますが、残念ながら横浜市、川崎市さんは御参加いただけなかったという経緯がございます。それは自前で最初からシステムをお持ちだったという当初の経緯がございます。それがずっと続いているわけなんですが、少なくとも電子自治体という考え方の中では、ある程度十数年やってきて、一つの成果は出てきただろうというふうには認識してございます。それは町村部を含めて、なかなか自前ではそういったものの構築でありますとか、運用が難しいところを県が主体となってできているというところはございます。
　国が進めているマイナポータルは、どちらかというとマイナンバーと連携して、個人がマイナンバーカードさえお持ちであれば、自分の情報にすぐアクセスできたり、申請手続をすぐできるという、ちょっと視点が違うものでございまして、ただその中で並び立っていくのか、あるいはマイナポータルのほうに吸収されて、いずれは県独自のものが消えていくのかというのは、ちょっとまだ経緯を見ていかないと分からないところもございますが、国はマイナンバーカードを中心に進めたいという考えで今進めてございますので、いずれは県の、例えば手続でありますとか、そういったものもマイナンバーのほうに集約される可能性もございます。
　あるいはネットワークに関しましても、今ですと地方公共団体が1,800近くの、全てつながっているＬＧＷＡＮというネットワークがございますけれども、それとは別に国は国でネットワークを持っていると。ただ、国もガバメントクラウドというのをちょっと進めてございますので、そういった基盤等も合わせて、将来の形がどうなるかというのは、ちょっとまだ情報もないですし、方向性もまだちょっと明確にはお答えできないところではございます。
鈴木委員
　ありがとうございました。これで終わりますが、先ほどからデジタルデバイドの話もありますけれども、これを克服していくというのがやっぱり、少なくとも、デンマークもスウェーデンも行かせていただきましたけれども、あそこ自体17年ぐらいかかっている。だらだらとこういうふうに聞かなければいけないのかという思いがあるのと同時に、先ほどから私が言っているＵＩ、ＵＸというようなものについては、あなた方は不可分、やってくだされば くださるほどこの問題というのは、少しでも解決が早いだろうというふうに思いますので、ぜひとも御尽力をよろしくお願いしたいと思います。以上です。